

Title	「ライブラリー・スキーマ」の京阪神における策定事例報告
Author(s)	菊谷, 智史
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98312
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「ライブラリー・スキーマ」の 京阪神における策定事例報告

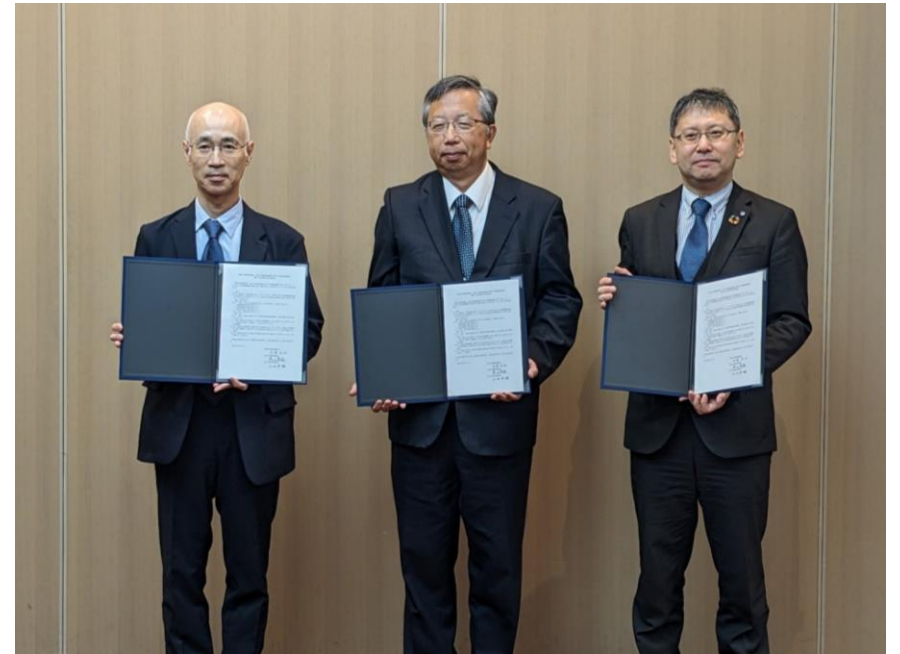
大阪大学附属図書館箕面図書館課 外国学図書館班
菊谷 智史

なぜ京阪神で？

京阪神3大学図書館の協定（2023.6.22）

『オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）』が掲げる「大学図書館間の効果的な連携」のため、京阪神の3大学図書館（京都大学、大阪大学、神戸大学）が連携・協力するための協定

3大学の図書館職員が、現場レベルで交流・協働することにより、業務の省力化・高度化



なぜ京阪神で？

3館長ネットワークによる統括
 幹事会：3部長、担当者会：担当3課長

太枠 はテーマごとの幹事役大学

学術情報資源の確保

電子ジャーナル契約（オープンアクセス包括契約を含む）に係る調査・研究・開発を協働して行う。

学術情報資源の創出

図書館資料等のデジタルアーカイブ化に係る調査・研究・開発を協働して行う。

研究成果発信の支援

機関リポジトリのコンテンツ増進（研究データ管理・公開支援を含む）に係る調査・研究・開発を協働して行う。

京都大学図書館機構・附図	
総務課	総務掛
	経理掛
研究支援課	研究支援第一掛
	研究支援第二掛
	研究支援第三掛
	システム管理掛
利用支援課	情報企画掛
	情報管理掛
	情報サービス掛
	宇治地区図書掛
各部局図書館室	各部局図書担当掛

大阪大学附属図書館	
図書館企画課	企画係
	庶務係
	会計係
学術情報整備課	学術情報収集班
	学術情報組織化班
図書館サービス課	フロアサービス班
	情報ナビゲート班
	生命科学図書館班
	理工学図書館班
箕面図書館課	外国学図書館班

神戸大学附属図書館	
情報管理課	企画係
	管理係
	資料整備G（受入）
	資料整備G（雑誌）
	資料整備G（目録）
	資料整備G（整備）
	電子情報G（電子図書館）
	電子情報G（震災文庫）
	電子情報G（システム管理）
情報サービス課	各系図書館情報サービス係
	情報リテラシー係

なぜ京阪神で？

- 審議のまとめ

“「デジタル・ライブラリー」の実現には...『ライブラリー・スキーマ』を明確にした上で、利用者が何を求めているかを整理・再検討し、それを反映してデザインされた最適な環境を構築する必要がある”



- 3大学で「大学図書館の本質的機能とオープンサイエンス時代におけるその表現」についての検討

なぜ京阪神で？

- 3大学の協定に基づく「京阪神デジタルライブラリー構想」の一環として、「京阪神ライブラリー・スキーマ検討WG」を設置
- 協定の「学術情報資源の確保」「学術情報資源の創出」「研究成果発信の支援」に理論的土台を与えることを期待

杉田茂樹. 「2030デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会(第2回). 2023年10月19日

検討体制

各大学から4名ずつ(50音順)

赤澤久弥(京都大学附属図書館利用支援課長)

飯田智子(京都大学附属図書館総務課課長補佐)

石黒康太(神戸大学附属図書館保健科学情報サービス係長)

菊谷智史(大阪大学附属図書館箕面図書館課外国学図書館班 管理・学術情報整備担当)

小陳左和子(大阪大学附属図書館事務部長)

坂田絵理子(大阪大学附属図書館図書館サービス課 学習・調査支援担当)

杉田茂樹(京都大学附属図書館事務部長)

鈴木雅子(神戸大学附属図書館事務部長)

田中志瑞子(神戸大学附属図書館情報リテラシー係長)

中山貴弘(大阪大学附属図書館図書館サービス課長)

西川真樹子(京都大学附属図書館利用支援課課長補佐)

北條風行(神戸大学附属図書館情報サービス課長)

見守り隊 3部長

課長隊 3課長 (赤青緑主査以外の)

実働隊 (WG)

各大学から1~2名

いろいろあって... (MTG計13回)

※検討過程の様子は下記発表をご覧ください

西川真樹子. 京都大学附属図書館、大阪大学附属図書館及び神戸大学附属図書館の連携・協力活動におけるライブラリー・スキーマ検討の取り組み. 令和5(2023)年度セミナー「オープンサイエンス時代における〈場〉としての大学図書館:事例から見るライブラリー・スキーマ」, 2024年1月26日

<https://www.janul.jp/ja/operations/symposia/2023/symp2023-2>

京阪神3大学図書館 ライブラリー・スキーマ

利用者のニーズ

研究者



1. 自分の研究活動と教育活動に必要なデータ・情報をもれなく手に入れたい
2. 研究費（外部資金）を獲得したい
3. 研究時間を確保したい
4. 研究成果（論文）を多くの人に読んでほしい
5. 研究成果を上げたい
6. etc...

学生



1. 幅広い分野の知識を身に付けたい
2. 専門分野の知識を深く探求したい
3. 学修・研究活動の成果を正しく発表したい
4. 勉学のための場が欲しい
5. etc...

etc.
職員
学外者
等々...



研究を	本質的機能	役割	利用者のニーズ	
	大学	図書館	研究者	学生
▼ 創出する	スケール : 一人の人間が実現可能な範囲を超えて研究の規模を拡大する 研究の発展のために、データ・情報やそれらのアクセス環境を整備して提供する	研究者が必要とするデータ・情報に漏れなく効率的にアクセスできる環境を整える。研究者がデータ・情報を活用するための環境を整備する。		
	コミュニティ : 研究者間の連携・共同活動を推進する 研究者の連携や共同活動を推進するために、環境を整備する	研究者が他の研究者とともに研究活動ができる場を提供する。研究者が他の研究者とともに研究活動を容易かつ安全にできる仕組みを提供する。健全かつ公正な学術コミュニケーションを支援する。		
▼ 継承する	人材 : 次世代を担う資質を備えた人材を育成する 次世代を担う資質を備えた人材を育成するために、環境を整備する	次世代を担う資質を備えた人材を育成するために必要なデータ・情報、環境を整備して提供する。		
	成果 : 研究を蓄積し、次世代に継承する 研究活動に伴い生成されるデータ・情報を蓄積し、次世代に継承する	研究の方法、研究活動の過程で生み出されたデータ・情報を保存し、必要に応じてアクセスできるように整備する。		
▼ 発信する	社会貢献 : 大学が生み出す知識・技術・人材を通して社会に貢献する 教育・研究活動の過程で生み出された/蓄積されたデータ・情報を活用して、社会に貢献する	収集したコレクション、研究成果等を一般の人々が障壁なくアクセスできるように整備し公開する。		

※横軸（本質的機能、役割）と縦軸（利用者のニーズ）を合わせて、具体的な業務や設備を導く。

できあがったもの

- オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方を本質に遡り自己規定するものであり、3大学図書館の連携協力活動に理論的土台を与えることを目標としている
- 研究大学である3大学における図書館の行動原理を図式化したもの
- 広く他機関での「ライブラリー・スキーマ」検討の参考となり、また我々大学図書館が何を拠り所として業務を行っているのか、また何を行うべきなのかを考える材料となることを期している

できあがったもの

- 表形式

縦軸:大学の「本質的機能」(研究を創出する・研究を継承する・研究を発信する)
対応する大学図書館の「本質的機能」
それらを現在の文脈において具体化した「役割」

横軸:研究者や学生など利用者のニーズの例示

⇒ 大学図書館の「本質的機能」「役割」と、利用者のニーズとを突き合わせ、両者が交差する点に具体的な業務や設備を書き込めるようにした。
これにより、現状のサービスの整理や今後取り組むべきサービスの検討が可能となる。

縦軸

大学の本質的機能

- ・ **スケール**: 一人の人間が実現可能な範囲を超えて研究の規模を拡大する
- ・ **コミュニティ**: 研究者間の連携・共同活動を推進する
- ・ **人材**: 次世代を担う資質を備えた人材を育成する
- ・ **成果**: 研究を蓄積し、次世代に継承する
- ・ **社会貢献**: 大学が生み出す知識・技術・人材を通して社会に貢献する

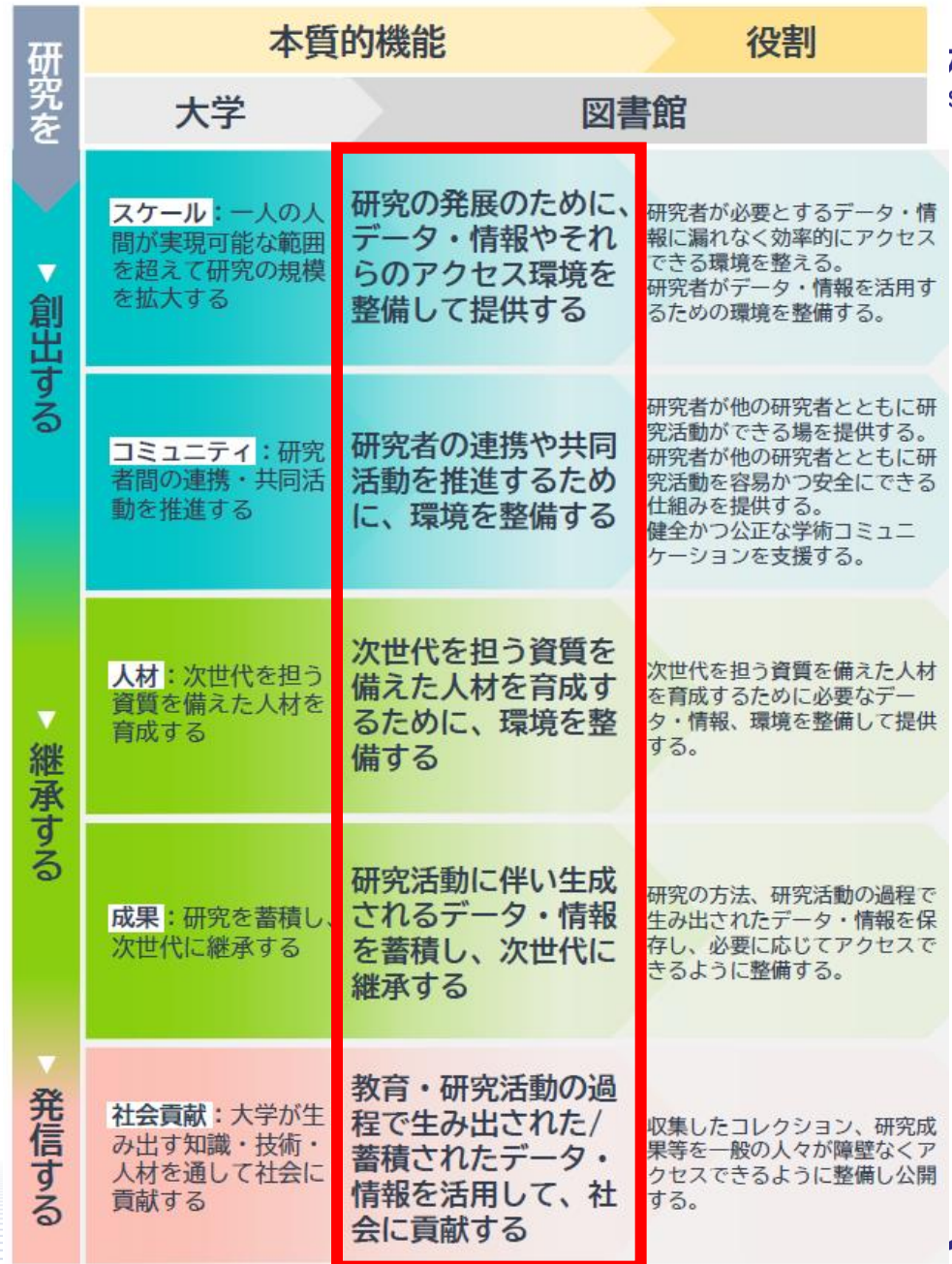


縦軸

大学図書館の本質的機能

大学の本質的機能に対応した大学図書館の本質的機能

- ・ **スケール**: 研究の発展のために、データ・情報やそれらのアクセス環境を整備して提供する
- ・ **コミュニティ**: 研究者の連携や共同活動を進めるために、環境を整備する
- ・ **人材**: 次世代を担う資質を備えた人材を育成するために、環境を整備する
- ・ **成果**: 研究活動に伴い生成されるデータ・情報を蓄積し、次世代に継承する
- ・ **社会貢献**: 教育・研究活動の過程で生み出された/蓄積されたデータ・情報を活用して、社会に貢献する



縦軸

大学図書館の役割

大学の本質的機能を現在の文脈において具体化

・ スケール

- 研究者が必要とするデータ・情報に漏れなく効率的にアクセスできる環境を整える
- 研究者がデータ・情報を活用するための環境を整備する

・ コミュニティ

- 研究者が他の研究者とともに研究活動ができる場を提供する
- 研究者が他の研究者とともに研究活動を容易かつ安全にできる仕組みを提供する
- 健全かつ公正な学術コミュニケーションを支援する

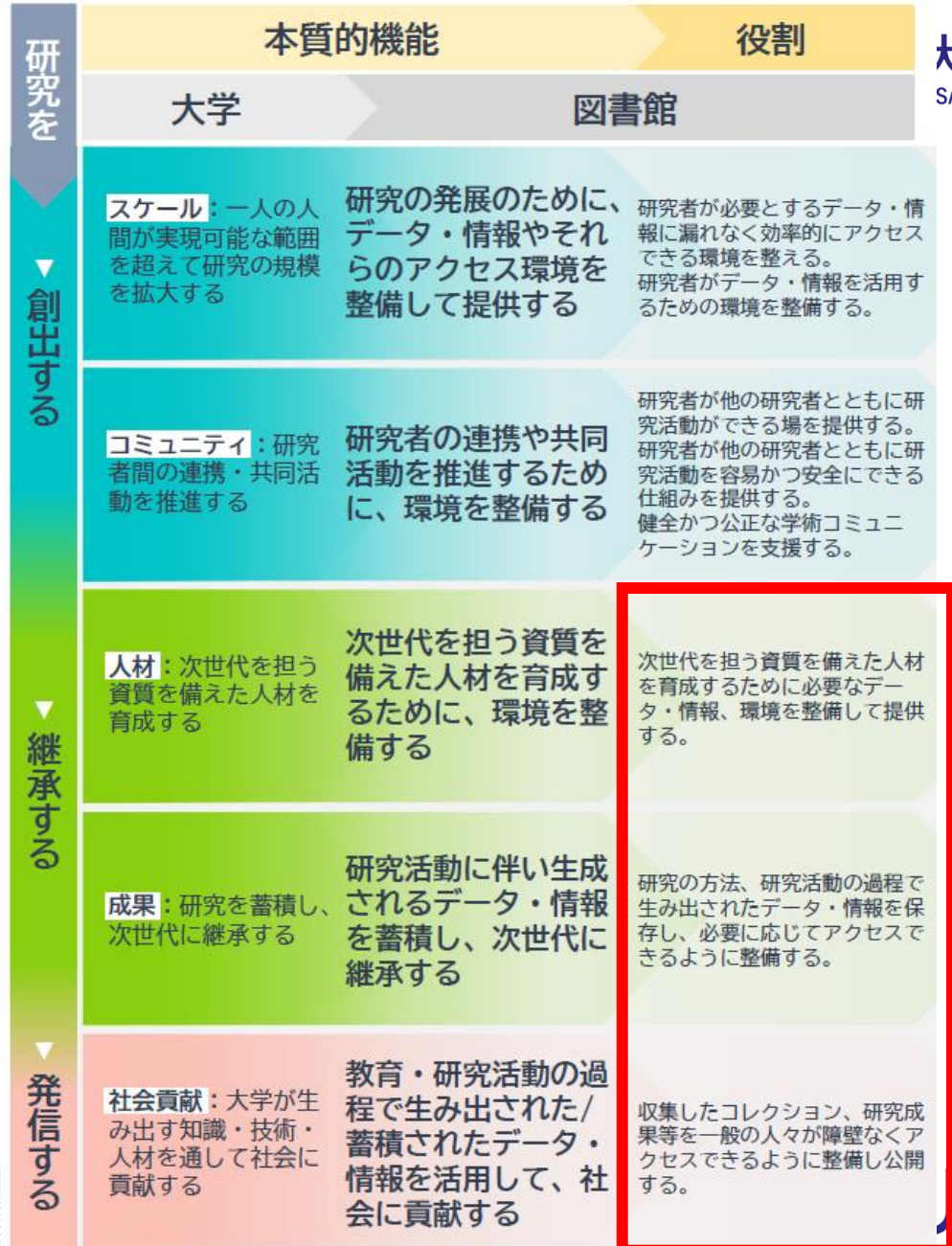


縦軸

大学図書館の役割

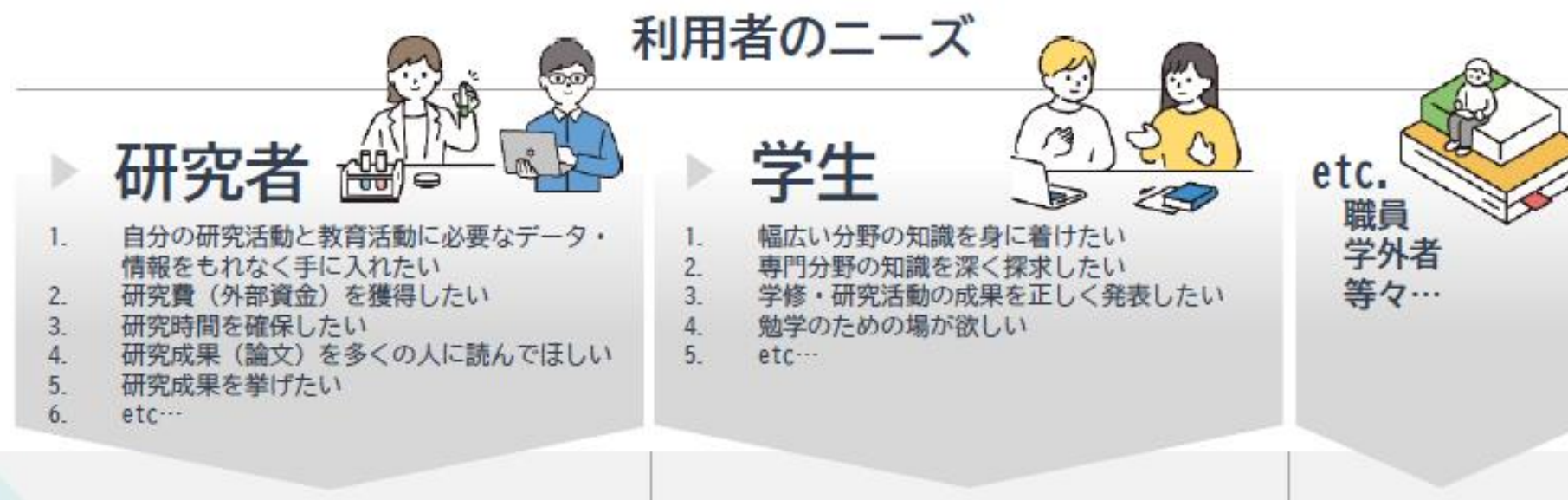
大学の本質的機能を現在の文脈において具体化

- ・ **人材**
 - 次世代を担う資質を備えた人材を育成するために必要なデータ・情報、環境を整備して提供する
- ・ **成果**
 - 研究の方法、研究活動の過程で生み出されたデータ・情報を保存し、必要に応じてアクセスできるように整備する
- ・ **社会貢献**
 - 収集したコレクション、研究成果等を一般の人々が障壁なくアクセスできるように整備し公開する



横軸

- 利用者のニーズの例示
- 研究者や学生、その他様々な関係者を想定



京阪神3大学図書館 ライブラリー・スキーマ (記入例)

利用者のニーズ

研究を	本質的機能		役割		研究者		学生		etc. 職員 学外者 等々...	
	大学	図書館	大学	図書館	研究者	学生	研究者	学生	職員	学外者
▼ 創出する	スケール: 一人の人間が実現可能な範囲を超えて研究の規模を拡大する	研究の発展のために、データ・情報やそれらのアクセス環境を整備して提供する	研究者が必要とするデータ・情報に漏れなく効率的にアクセスできる環境を整える。研究者がデータ・情報を活用するための環境を整備する。	レファレンス						
	コミュニティ: 研究者間の連携・共同活動を推進する	研究者の連携や共同活動を推進するために、環境を整備する	研究者が他の研究者とともに研究活動ができる場を提供する。研究者が他の研究者とともに研究活動を容易かつ安全にできる仕組みを提供する。健全かつ公正な学術コミュニケーションを支援する。	共同研究室						
▼ 継承する	人材: 次世代を担う資質を備えた人材を育成する	次世代を担う資質を備えた人材を育成するために、環境を整備する	次世代を担う資質を備えた人材を育成するために必要なデータ・情報、環境を整備して提供する。							
	成果: 研究を蓄積し、次世代に継承する	研究活動に伴い生成されるデータ・情報を蓄積し、次世代に継承する	研究の方法、研究活動の過程で生み出されたデータ・情報を保存し、必要に応じてアクセスできるように整備する。							
▼ 発信する	社会貢献: 大学が生み出す知識・技術・人材を通して社会に貢献する	教育・研究活動の過程で生み出された/蓄積されたデータ・情報を活用して、社会に貢献する	収集したコレクション、研究成果等を一般の人々が障壁なくアクセスできるように整備し公開する。	出版支援						
					具体的な業務や設備を記入した例					

その後

- 各大学でパブリックコメントを募集

「研究大学に力点を置いたのがよくわかる内容になっている」

「現在の業務の整理と、今後の業務のありかたを考える指針として機能しうらと思う」

「京阪神3大学図書館を冠するには3大学らしさが薄い」

「この表の受け止め方がわからない。目標や心構え的なことなのか、事務分掌となるのか」など

- 準備中の京阪神連携のウェブサイトでのこのライブラリー・スキーマを公開予定

<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/mainlib/keihanshindl/>

- 今後の大学図書館の役割や利用者のニーズの変化等に応じて、改訂していくことも想定している

ライブラリー・スキーマとは

- 審議のまとめ

“...情報へのアクセスという観点から教員や学生がそれぞれどのような情報利用空間を必要とするかについての整理・再検討が必要となる。その前提として、様々な利用者に適した図書館のサービスをデザインするために必要な、自らの存在を規定する基本的な論理構造としての「ライブラリー・スキーマ」を明確にする必要がある。”

ライブラリー・スキーマとは

- オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会(第7回)議事録

坂井先生 “ユーザービューが1つや2つじゃないですよ、教育・研究の現場は。それは学生のビューであるとともに、教える側のビューであり、また分野のいろんなビューがあって、それらを今までは1つの図書館機能として見せて実現してきたけど、デジタル化に伴って複数の顔を見せられるようになっていきます。そうはいうものの、**図書館を主体としたときの論理構造は1つで、それが複数のビューに対応できるものになっていくのじゃないか**というお話です。”

スキーマ、ビュー ⇒ データベースのアナロジー？

ライブラリー・スキーマとは

- 「2030デジタル・ライブラリー」推進に向けたロードマップ

【2】場:「ライブラリー・スキーマ」に基づく機能の具体化

“大学図書館の論理構造としての「ライブラリー・スキーマ」の明確化とそれに基づく大学図書館機能を具体化し実装すること”

2030年の望ましい大学図書館

“各大学図書館自らの存在を規定する基本的な論理構造としての「ライブラリー・スキーマ」に基づいたシステム開発がなされ...”

- ⇒ テクノロジーの発展、学習・研究環境・行動の変化(オープンサイエンス、データ駆動型研究)
それに対応するためにデジタル・ライブラリーの実現
デジタル・ライブラリー実現のために大学図書館の再構築が必要
再構築のため、大学図書館の業務の整理に必要なツールとしての「ライブラリー・スキーマ」

ライブラリー・スキーマとは

- 審議のまとめ

“教育・研究のDXが、学内の様々な部署の連携を必要とする変革であることから、大学図書館においても、各大学の教育・研究推進体制全体の中での位置付けや役割を意識しながら、その機能について検討していく必要がある”

- 誰に向けて作成するか

図書館職員：業務の整理・検討のために

大学内の他部署：全学的な場の整理、業務分担のために（大学として効率的に）

教員・執行部：図書館がやっていくことやその意義の理解のために

（図書館の存在意義、プレゼンス、人員・予算の確保

背景：デジタル化、AI→図書館員の存在が見えづらくなる）

業務を整理するツールとして見直し

「業務整理のツール」を1つの評価基準と仮定

- 他部署との業務整理
 - 縦軸に関連他部署の本質的機能を追加しやすい
 - 大学図書館の本質的機能や役割がフラット
(資料の保存やメタデータ付与は共同研究室の設置と同じ優先度?)
- 大学図書館の意義やプレゼンス
 - 大学の本質的機能をベースとしているため、大学図書館がやっていることとそれへの貢献が見えやすい
 - 大学図書館の専門性や強みがはっきりと見えづらい

検討の際の論点

- “本質”や“根本”とは何を指すか
現在行っている業務を何のために行っているかを突き詰める
過去から今にいたる業務の変遷で一貫しているものを探す
大学や図書館がなかったら、という状況を想定
過去から継承してきた資源・スキル
- こういう図書館にしたいといった方向性を含むか
- 既にある理念や目標との違い
- 本質はすべての大学図書館で共通であるべきかどうか
e.g. 大学院のみの研究大学、学部教育に重点を置く大学

大学図書館全体で議論を進めるために

- 職員の多くは日々の業務に忙殺
→ ライブラリー・スキーマを作成する必要性の明確化
- できたものの受けとめ方がわからない。どう評価すべきかわからない
→ ライブラリー・スキーマ自体がどういうものかの明確化

ありがとうございました

